

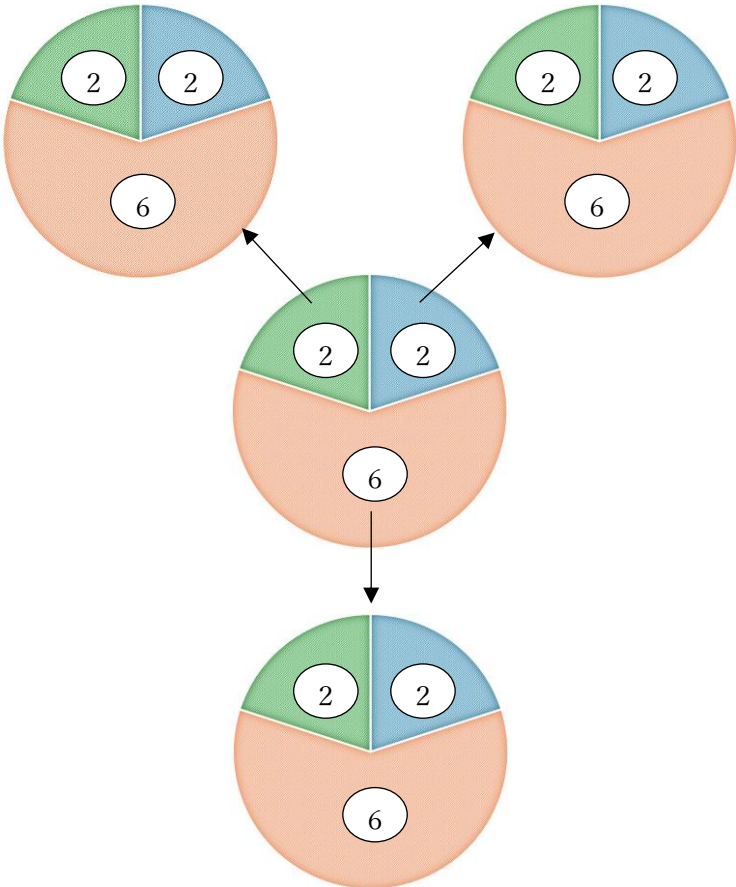
私の心に棲んでいる曲直・正邪の二元性とごちゃ混ぜを以って人間性（良心）は形成されている。私の平時の心には図(表)－¹のと通りの仏性（正心）と魔性（邪心）の相反する心が間違いなく棲み付いていることを自覚する、これを私は「^{ぶつまどうご}仏魔同居」と称している。本を質せば根源的には、私が如何ともし難い宇宙界の二元相対（待）性自然原理の動静・揺動によるものなのだ。仏性は「陰」に対応し、魔性は「陽」に対応させることから、魔性は怖いもの・忌避すべき恐ろしいものという意味ではない。また、前者に和魂を、後者に荒魂に対応させている。同居というものの私は撞着・蒙昧することなく何の不都合もないが、世の中には精神疾患で多くの人が悩んでいるはずであるが、どちらか一方に偏ることが最大の要因である。私の場合はいずれか一方だけが占有しているのではない、自身の心の中ではいつも^{ぶつま}仏魔が睨み合っているのだ、常に対決・格闘しているという実感を持つ。いい意味では丁々発止の意見交換・議論ということだ。人間は「^{ぶつまどうご}仏魔同居」なのだ、と素直に認めると、良心・良知はきれいに統合・合一化を図って落ち着いた平静に保持してくれるのだ。ところが、**そういう自分に率直に向き合えない人は、必ず内部対立を発症する。**平静、すなわち、^{ぶつま}仏魔が融和しているということは、前者対後者は 50 対 50 で微妙な調和帯――少しの外乱・喜怒哀楽で 51 対 49、あるいは、49 対 51 になることだ。それを 2 値化すれば 1 対 0、あるいは、0 対 1 となるのだ。つまり、どちらかに総取り傾斜するのだ。極論すれば、魔の極限化が犯罪者となり、仏の極限化がうつ病となる可能性大とみている。

その「仏性」を自覚し少しの磨きを掛けたいという向上心もあり、それって具体的になあに？となる。娑婆の生身の人間――地域コミュニティの諸々の「何とか会の長」とか、似非識者に頼るなどは取るに足らず！――そんな輩に聞いても詮ないこと。

それでは、神様、仏様、キリスト様に聞く他はない。神に係れば、我が国古神道の「^{かなながら}随神の道（人の私心を加えない、人為的技巧のない神意本来の道）」・八百万の神・アニミズム観、すなわち、この地球上の動植物（生物）・無機物を問わない総てのものの中にそれぞれの魂が宿っているという教えに共感すること。仏に係れば「^{むげこう}無量寿・無碍光の道（量り知れないほどの尊い命を存分に活かす道）」・大乘仏教の説く三界萬霊・山川草木悉皆成 仏・^{さんぜんそうもくしつかいじょうぶつ}万葉化仏の教えに共感すること。キリストに係ればその博愛主義（人を裁くなかれ・新約聖書 マタイによる福音書 7 章 1-12 節）にだけは頭を垂れ^{ひれ}平伏することが出来る。無量無限・無限無窮の宇宙から吹き付ける大気（空気ではない）こそが信頼に足る根源である。神・仏・キは喜怒哀楽の感情を^{もてあそ}弄んで暴れることはないのだ。自己対話の舞台をそのような霊性空間に求めたくなる。つまり、3 者の教えは、私の人間を少しでも磨くための砥石、頼れるものである。その神・仏・キと人間との仲介者に神職・僧職・聖職がいるだろうとなるが、私はいつも “貴方、そんな立派な言葉を民衆・大衆に垂れるが、そのとおり実行しているのか？” と 100%の懷疑を持つ。これに対して “私らも人間だ” と居直るだろう、それではそんじょそこらの生身の人間と何も変わらないとの白状だろうから真面目に相手に出来ないのだ。これまで、色んな神・僧・聖の人の講演会を聞いて来たが、“有限実行の有りや否や？” の眼光を鋭く当てて来た。

さて、ここで図(表)－²のと通りの「2・6・2」の自然法則が浮かんた。2・2 の処に対して両極の^{ぶつま}仏魔を配当し、6 は両者がごちゃ混ぜとなっている普通の状態（融合域）を当てると分かり易い。もち

ろん、その境目は明確ではなく、人間の心（人間性）は両極^{ぶつま}仏魔と融合域のいわば3セットグラデーション模様になっているのだ。

私に棲む二人の自分			「2・6・2」の自然法則図化		
良 心（致良知）					
仏性	魔性	仏教界			
和魂	荒魂	神道界			
黒	白	二元相対（待）性原理			
正心	邪心				
消極性	積極性				
慈悲 慈愛	冷酷 無比				
弱	強				
柔軟	硬直				
陰	陽				
50%	50%				
2 仏	2 魔	両極の状態		「 2 ・ 6 ・ 2 」の 自然法則	
6 (融合域)		普通の状態			
図(表)－1				図(表)－2	

次の聖賢に耳を傾けてみる。

その1；鈴木大拙著「日本人の靈性」（角川ソフィア文庫）P389 に図(表)－3 のとおりのフレーズがある。

禪の生き方は、（一つのもの・ことに対して）いつも一方に肯定をおき、また、一方に否定をおく。その二つは絶対的に矛盾する。それをそのままにしておく、否定にも依らず、肯定にも依らない。そしてそこで一句を言えと、迫って来るのである。この一句が絶対の一句である。

図(表)－3

その2；松原泰道著「禅語百選」（祥伝社）182 頁を参照する。

（自分の中の2人）

人間は、誰でもこのA・B二人の上に乗っかっているのです。

Aは、常識的にいう説明を要しないこの自分で、これを「日常的自我」といいます。

Bは、Aに呼びかける自分で、これを「本質（本来）的自分」といいます。

Aは外在的存在ですぐ分かりますが、Bは内在的存在でAの底に深く埋もれているので、外からは分かりません。

人間とは、要するにAとBの「同行二人」で歩み続ける旅人です。

この二人の話し合いが多いほど、その人柄は豊かになり、少ないほど貧しくなります。

しかも、AとBは時には並び、時には前後して歩くことが考えられます。

さらに、AとBは重なり合って、あたかも同一人になるのが望ましいのです。

「主人公」という人物Aと、「はい」と答えるBとが一つに溶け合くと「主人公」がそのまま「はい」の答えに生まれます。さらに、Aから呼ばれているBが、感情に走ろうとするAを逆に自分の名の「主人公」と呼ぶことによって自分のところへ引き戻すのです。

図(表)－4

私は二人が紹介したような精神修養を果たしてはいないが、内容はとても含蓄の深い意味合いを感じる、このようなフレーズに接すると感激する。前段の私の「仏魔同居」に共通する訓えを感じる。私は様々な懇談の場面で話すが、とにもかくにも、根底の思想信条、日常の考え方が何かに、どちらかに偏倚・偏向して拘泥・執着することは私の最も嫌う処であり、強く自戒している。自分に内在する「仏魔同居」を率直に認め不断の対話を促す意識を強く持つことにしている。

(end)